

SGH 事業の取り組み（第2年次）— 2016 年度経過報告

Initiatives of SGH project (2nd year) – 2016 progress report

SGH委員会

杉本紀子 堀内順治 宇佐見尚子
長友結希 中村文宣 若宮知佐

要旨

今年度は、SGH 事業の 2015 年度の取組によって明らかになった課題に年度当初から取り組んでいる。特に課題研究については総合的学習の時間における体系化を実質的に行い、移行期に入っている。また課題研究を支えるための外部支援・サポート体制をより整備し、外部と連携して課題研究を充実させる取り組みをより深化させることに努めている。さらに昨年度には着手できなかった新たな取り組みとして研究倫理策定を行い、現時点までにガイドラインの作成を終えている。一方仮説Ⅲ「評価」に関しては評価策定委員会の開催を開始し、大学との特別研究プロジェクトを立ち上げて連携強化を図れる体制が出来つつある。

1 本校 SGH 研究開発の概要と 2015 年度の成果

本校は 2015 年度に SGH 指定校となった。SGH 研究開発構想名はく多文化共生社会を支える「組織力」「対話力」「実行力」の育成である。本事業の主軸は生徒の課題研究とその評価方法の策定および事業を通して育成される資質・能力の評価の策定である。

2015 年度は初年度ということもあり、事業の運営方法が明確に定まらない中で暗中模索を繰り返しながらではあったが、生徒の課題研究の推進を重点的に進めてきた。以下にそれぞれの仮説ごとに昨年度の時点での課題を概説する。

1.1 仮説Ⅰ 課題研究の主軸の概念化と課題意識の焦点化—「国際教養」の整備と体系的プログラム構築による課題研究の質の高度化

SGH の課題研究テーマ決定の原点は以下のような考え方から出発している。

無数にある社会課題とそれについての生徒の多様な課題意識を、「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」という概念を用いて焦点化することによって、生徒は問題の核心を抽出することができる。また、その概念を主軸として多角的な視点から課題解決に取り組むことは、課題解決に向かう組織力を育成するために有効である。

この仮説の本格的な検証はまだ定量・定数的には行っていない。しかし、問題がどこに存在するのかが研究の過程で考察していく際に生徒から発せられる言葉の中にこれら的大テーマが入ってくることは非常に多い。また最終的な論文の形に仕上げられたものを見ると、これら的大テーマが個々の課題の主軸となって分析・考察が進められたことがよく分かる。よって大テーマとして掲げた「概念」が課題意識の焦点化に役立つ傾向にあると言えるだろう。また、「概念」として掲げたことは、教科の学習内容との関連を意識させることに大いに役立っている。研究の過程で教科の学習経験を持ち出して話し合っていたり、海外ワークキャンプでのディスカッションテーマと関わりを持たせたりする姿が見られた点がそれを象徴していると考えられる。

課題研究は、4 年生から 6 年生までの総合的学習の時間を軸として行っている。ただし、各

学年週 1 時間 (1 単位) の開設であるため、研究活動の大部分は、生徒が部活動などと両立しながら放課後や課外での時間を活用して行っている。構想段階では、教育課程内でのさらなる時間設定が難しいと考えられたため、総合的学習の時間である各学年の「国際教養」での学習をさらに体系化することで研究の質を上げることを想定した。昨年度の段階では以下のような仮説から出発している。

「国際 4 (Personal Project)」「国際 5 (海外ワークキャンプを含む)」「国際 6」での 3 年間の学習内容を、連続的・継続的なものとする事で、生徒の課題研究が年次を追って深まり、高度なものになると考える。また、その基盤としての前期課程での国際教養との連続性・発展性もさらに明らかなものにする。そのことは結果的に探究的な学習のスキルを早期に身に着けることとなり、課題研究に対する意識の質を高めるものと考えられる。

「国際教養」の体系化については、本校の研究部と国際教養委員会が中心となり、校内研究会において今年度現在までに 2 回の検討の機会を持った。結果として今年度は以下のように運営されている。

<2016 年度 課題研究実施形態>

4 年生

(3 年次 3 学期より IB の Personal Project を開始)

↓

4 年次 4 月より 10 月初旬まで、Personal Project 内での課題研究を実施 (学年内の発表会を含む)

↓

4 年次 10 月より 11 月初旬まで、課題研究に向けてのガイダンス①～④

- ① 課題設定の仕方
- ② 研究倫理について
- ③ 研究論文の書き方 (理系・科学)
- ④ 研究論文の書き方 (文系・人文・社会)

4 年次 11 月より (5 年次 12 月までを予定) 課題研究 I を実施※PP からの継続研究あり。

5 年生

5 年次 4 月より (5 年次 12 月までを予定) 課題研究 I を実施

※PP あるいは昨年度の ISS チャレンジ課題研究 (4 年次) からの継続研究あり。

6 年生

6 年次 4 月より (6 年次 1 月までを予定) 課題研究 II を実施

※昨年度の課題研究 I (5 年次) からの継続研究あり。

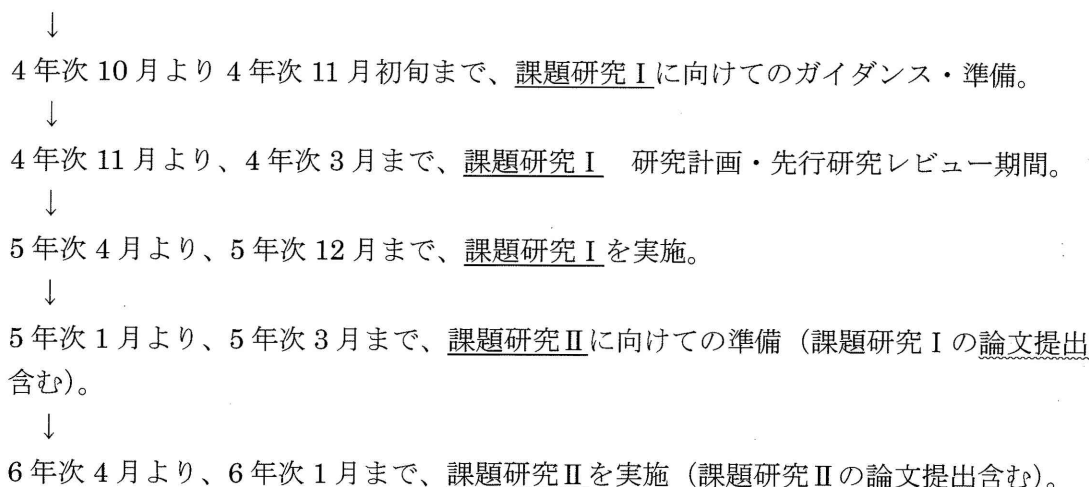
今年度に関しては、体系化の移行期と言うこともあり、完成年度とは違った期間の取り方となっている。完成期の研究期間の区分けは以下のような予定である。

<完成期課題研究実施形態>

3 年次 3 学期より IB の Personal Project に向けての準備を開始

↓

4 年次 4 月より 10 月初旬まで、Personal Project 内での課題研究を実施 (報告レポート提出・学年内の発表会を含む)



課題研究における解決すべき問題は多い。例えば IBMYP 実施校としては、PP は必須である。また今年度から MYP のプログラムは New Chapter Guide に沿って実施されている。そのために PP の成果提出時期、およびそのモデレーションを受ける時期等が変更されたことを鑑みて、PP と課題研究をどのように位置づけていくかを再考した。結果として後期課程単独で見れば PP の実施期間は従来よりも短い、その分 5 年次の課題研究に向けてのガイダンスや研究計画・先行研究のレビューの時間は多くとれることとなっている。

また今年度にも見られる傾向として徐々に 3 年間・2 年間の継続研究が増えてきている。従来 4 年・5 年・6 年での課題研究が単独にバラバラで行われており、3 年間の研究体系が成立しているとは言い難かった状況が改善されつつあると言ってよいだろう。そうした見地から見ても、年度を超えて研究活動が継続できるシステムになっていくことは望ましいことと言ってよい。ただし、年度を超えての研究体制と指導教員の指導体制の連携はまだとれていない。今後は課題研究の指導教員の組織作りが課題となる。

1.2 仮説Ⅱ 課題研究とその評価に際しての外部機関との連携強化

仮説Ⅱについては、構想段階において「ポスト・アクティブラーニング」の形を企図して設定した。本校の生徒は発信する意欲・ボランティア精神共に旺盛であり、校外でのあらゆる活動に自主的に参加しようという姿勢を持っている。そうした姿勢を研究活動にも生かせないかというのが仮説発想の根源であった。

課題意識を他者と共有し、組織を構築して研究することについては、昨年度の ISS チャレンジでの研究にチームによる研究が多かったことも影響し、今年度の 4 年生～6 年生までのすべてにおいて全体的傾向としてチーム（グループ）による研究が多くある。もちろん個人による研究を否定しているわけではないが、生徒の中では、「問題を共有して互いに話しながら研究が進められる誰か」がそばにいるということは、研究のモチベーションにも関わるものであるようだ。

個人では困難な多面的リサーチなどを行うための外部連携、またそうした研究について外部からの評価を受ける場を獲得することについては後にその取組を詳述するが、生徒自身が外に目を向け、外部の社会人や研究者から助言をもらおうという姿勢をより強く持つようになっていように見える。しかしながら、日常の学校活動の中では時間制限も多く、希望する通りの外部支援が受けられていない研究もある。

昨年度の課題研究で ISS チャレンジに参加したもののうち、高い評価を得た 4 つのファイナ

リストの研究は、いずれも多くの外部連携を行い、情報・助言・評価のすべてに亘って「外部の力」を自分たちの研究に生かしていた。

例えば 2015 年度の ISS チャレンジのファイナリストに選ばれた「高校生にとって意味のある消費」をテーマにエシカルファッションのあり方について研究したチームは、年間を通して以下の外部支援者を自力で見つけ、コンタクトをとり、助言や支援を得ている。

- ・ people tree 広報・啓発担当 鈴木啓美
- ・ 東京都市大学 中原秀樹先生
- ・ foundation young in Australia
- ・ Ethical Fashion Japan 竹村伊央 代表
- ・ グッド・オン・ユウ、エシカル・コンシューマーズ・オーストラリア代表 ゴードン・ルノフ氏
- ・ 特定 NPO 法人環境市民チーフコーディネーター 有川真理子氏
- ・ プラチナムプロダクション所属モデル 鎌田安里紗氏
- ・ 特定 NPO 法人 Human Rights Now の皆様、特定 NPO 法人 ACE

本校の国際教養の学習は、各教科学習と連携・連動して進められ（教科間連携）、アクティブラーニングのスタイルを主体として進められているが、今後はさらに教科授業が外部と連携し、生徒が主体的に能動的に授業の推進力となるようなポスト・アクティブラーニングのスタイルを目指す。そのトライアルの形は現在 6 年生の「国際 A」の授業形態に認められる。

「国際 A」の「国際協力と社会貢献」（本校藤木教諭担当）では、頻繁に外部講師を招くだけでなく、外部との連携による授業展開を行っている。以下に昨年度と今年度の外部講師招聘の記録と今年度の取り組みを挙げる。

<2015 年度国際 A「国際協力と社会貢献」概要>

「社会に貢献する」とはどういうことなのか、日本という国の立場と、個人の立場の両方から捉えることを目的に、1 学期は日本の ODA 政策を中心に学び、2 学期・3 学期は NPO の存在意義や、様々な社会貢献の仕組みをひもといた。また多くのゲストスピーカーを招き、最新の情報を提供して頂き、意見交換の場をつくった。

表 1：授業でとりあげたトピックス

学期	トピックス	
1 学期	「日本の国際協力」 「国際協力 NGO」	国際協力の歴史、ODA 政策の特徴、新 ODA 大綱、JICA など 民間の国際協力の事例など
夏季休業期	「クラウドファンディング」	
2 学期	「NPO/NGO」 「CSR (企業の社会的責任)」 「社会貢献のあり方」 「コミュニティ財団」 「助成財団」 「ファンドレイジング」 「Giving December」	NPO/NGO の仕組みと役割 企業はなぜ CSR を行うのか なぜ社会貢献が今必要なのか 地域の課題を地域のリソースで解決する仕組み 寄付市場の可能性、お金の循環の変換 寄付する文化を創造する
3 学期	「ふるさと納税」	ふるさと納税の可能性

表2：特別講師

テーマ	講師
「日本の ODA と JICA の役割」	高砂大氏（独立行政法人国際協力機構 国内事業部）
「クラウドファンディング」	宮本聡氏（一般財団法人ジャパングビング 事務局長）
「Yahoo の CSR」	箕輪憲良氏（ヤフー株式会社 社長室社会貢献本部）
「助成財団の役割」	大澤香織（トヨタ財団 プログラムオフィサー）

<2016 年度国際 A 「国際協力と社会貢献」 の取り組みと特別講師招聘 >

国際 A 「国際協力と社会貢献」

2 学期・3 学期は、日本ファンドレイジング協会の協力のもと、「Our Life & Social Contribution」という講座を展開している。

内 容：

アメリカの Learning by Giving 財団が提供する Service Learnig の講座をモデルとして、社会貢献・寄付について学びつつ、自分たちで作成した評価規準を用いて NPO を評価し、用意された 30 万円の寄付先を決定。

外部講師一覧：

第 3 講 2016 年 9 月 12 日（月）

鵜尾雅隆氏（日本ファンドレイジング協会 代表理事）

Our Life & Social Contribution のキックオフ講座として講演

第 10 講 2016 年 1 月 17 日（月）

山田泰久氏（特定非営利活動法人 CANAPAN センター 代表理事）

「NPO の評価について」

第 13 講 2016 年 10 月 28 日（金）

木村真樹さん（公益財団法人あいちコミュニティ財団 代表理事）

「コミュニティ財団の役割と可能性」

今後の予定：

外部講師

宮本聡氏（一般財団法人ジャパングビング 事務局長）

八木輝義氏（株式会社サーチフィールド FAVVO 事業部リーダー）

→クラウドファンディングについての講義

発信・登壇：

2016 年 11 月 22 日（火） ファンドレイジング・サロン（主催：日本ファンドレイジング協会）
で生徒が授業発信・登壇

2016 年 12 月 3 日（土） 平成 28 年度後期寄付フォーラム（主催：文部科学省）で生徒が授業
発信・登壇

1.3 仮説Ⅲ グローバル・コンピテンシーの評価規準・評価方法の策定

本校の SGH 事業においては、課題研究の評価だけでなく、資質・能力の評価の構造化を研究開発課題の一つとし、グローバル・コンピテンシーをどのように把握し、評価していくことができるかを検証する。

評価基準・評価方法の策定においては校内のみで閉じることなく、外部機関と連携・共同開発にあたり、基準と方法の妥当性と信頼性を高めることを目標にしている。

昨年度の段階では、課題研究の研究計画や研究経過の一部について、外部評価を受けるにとどまった。生徒の課題研究に関しては、本校の公開授業研究会や外部での SGH 成果発表会などで一部質的評価を受けてはいるが、根拠のある数的評価には至らなかった。また課題研究の評価をどのように資質・能力の評価につなげていくかについては、年度末にその課題が見えた時点で終わってしまっていた。

今年度は昨年度の反省を生かし、年度の前半から外部の有識者を招聘しての「評価策定委員会」を開催するとともに、大学との共同プロジェクト研究に応募し、大学との連携をより強化した。

<第1回評価策定委員会>

日 時 2016 (平成 28) 年 6 月 24 日 (金) 17:00-18:30 (最大)
場 所 東京学芸大学附属国際中等教育学校 N棟 1階ミーティングルーム
議 題 本校 SGH 事業における課題研究評価、資質・能力評価の現状と問題点
国内外の諸機関における資質・能力の評価についての情報提供・意見交換
進 行 (予定)

- (1) 本校 SGH 事業計画における評価事業の概要 (5 分)
- (2) 事業の実施状況の説明 (5 分)
- (3) 質疑 (5 分)
- (4) SGU 東京外国語大学の目指す学生像とその評価 (20 分)
(東京外国語大学 学長補佐 鈴木義一先生)
- (5) OECD との連携事業における資質・能力の評価の考え方 (20 分)
(東京学芸大学 特任教授 岸 学先生)
- (6) グローバル企業に求められる人材の資質・能力とは (15 分)
(シスコシステムズ 佐々木康子様) (*所属は開催時)
- (7) 全体質疑 (10 分)

本校参加者

佐藤正光 (学校長), 赤羽寿夫 (副校長), 星野あゆみ (副校長)
SGH 委員会 (杉本紀子, 宇佐見尚子, 長友結希, 中村文宣, 堀内順治, 若宮知佐)
事務担当 (足助志野)

<東京学芸大学平成 28 年度 特別教育研究推進経費 教育実践研究推進経費による「特別開発研究プロジェクト」>

- (1) プロジェクトの名称:「探究的学習のプロセスと成果に基づいた資質・能力の評価方法の開発と検証—生徒の「主体的取組」と「知の統合力」はどのように評価すべきか—」
- (2) プロジェクト担当者と役割

東京学芸大学附属 国際中等教育学校	杉本 紀子	研究代表・渉外・統括
	堀内 順治	研究・アクション等の実践状況調査
	若宮 知佐	資質・能力調査 (OECD)
	宇佐見 尚子	学習・研究内容と評価調査
	中村 文宣	資質・能力調査 (学習指導要領)
	長友 結希	研究・アクション等の実践状況調査
	河野 真也	統計とデータ分析
	嶽 里永子	学習・研究内容と評価調査 (課題研究)

東京学芸大学	岸 学 (特任教授)	OECD 関係情報提供・研究助言
	梶 井 芳 明	データ分析・解釈の研究助言
	杉 森 伸 吉	データ分析・解釈の研究助言

(3) プロジェクトの概要

近年「グローバル人材育成」の名の下に、現実の社会問題に即した焦点からアプローチする探究的学習への取組によって、多様化する現代社会の課題に対し、その核心をつかんで対応できる能力を育成することが求められている。OECD は従前からそうした能力を「キー・コンピテンシー」とし、以下のように定義している。

- 1 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力 (個人と社会との相互関係)
- 2 多様な社会グループにおける人間関係形成能力 (自己と他者との相互関係)
- 3 自律的に行動する能力 (個人の自律性と主体性)

また、検討が進められている新しい学習指導要領においては、「育成すべき資質・能力」を

- 1 何を知っているか、何ができるか：個別の知識・技能
- 2 知っていること・できることをどう使うか：思考力・判断力・表現力等
- 3 どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか：主体性・多様性・協働性・学びに向かう力など

に大別して設定している。

上記二つに共通する点としては「主体性」と「協働性」、また「獲得した知識や情報をどのように使うか」に着目したいわば「知の統合力」という点が挙げられる。だが、一体そうした資質や能力はどのように測るのか。その答えは出ていない。数多くの取組がなされていることは事実であるが、一般的に共有されるレベルではないだろう。

一方で学校教育現場においては主体的な学びと探究的な学びに重きをおいた実践が多く積み重ねられてきている。探究的学習やプロジェクト学習の実践によって、生徒個人に対する一定のスキルの評価はその方法や指標が発表され共有されているように見受けられる。しかしながら生徒がいかにか「主体的」であるのかということや、その姿勢や態度が課題解決にどのように活かされているのかについては、評価が進んでいないように思われる。本研究においては、生徒の探究的学習(主体的研究)のプロセス・成果を内部・外部の両者によって評価するシステムを構築し、それを通して特に「主体性」「協働性」や「知の統合力」を定義できる指標の提示を目指す。

2 研究開発の仮説検証のための取組

2.1 ISS チャレンジ実施状況(仮説I)

目的：生徒個人および団体による独自の研究活動(課題研究)の奨励を目的とし、生徒の研究活動の支援をするとともに、研究の過程および成果を審査し、優秀な研究を表彰する。

また、校外の研究発表会の学校代表選考も一部兼ねるものとする。

昨年度との比較：

エントリー数：2015年度…29 2016年度…44 (個人：10 グループ：34)

継続研究：4(昨年度、研究論文を提出+昨年度から発展させたテーマでエントリーしている)

研究代表者の所属学年：3年生及び4年生のエントリーが増加した

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
エントリー数	2	2	8	12	15	5

大テーマの設定：複数の大テーマを選択しているグループはそれぞれカウント

年度	リスク	葛藤と軋轢	教育
2015	8	11	14
2016	16	16	14

これまでの取り組み：(2016年10月現在)

日時	内容(★は今年度新たに実施した項目)
4月特別時間割	SGH オリエンテーション
5月20日	ISS チャレンジ SGH 部門オリエンテーション
6月6日	エントリーシート(研究計画書)提出締切
6月16日	研究代表者ミーティング①：研究計画書の自己評価について
7月11日	研究代表者ミーティング②：小グループにおける研究計画のプレゼン★
7月19日	研究代表者ミーティング③：研究計画書査読結果のフィードバック SGH フィールドノートの配布★
9月6日	研究代表者ミーティング④：ScFに向けたポスター作成について★
9月17・18日	スクールフェスティバルにおけるポスター発表★
9月24日	課題研究サポート①：本校卒業生による課題研究への助言および指導★

評価：研究計画書の評価

提出された研究計画書について、1グループにつき2名の査読者で実施(①SGH委員会
②SGHG)

*ルーブリックについて

昨年度のISSチャレンジで使用したものとほぼ同じものを使用した。

観点A：研究の目的 観点B：先行研究・先行実践 観点C：研究方法の妥当性
観点D：実現可能性 観点E：研究内容の妥当性

変更点：観点B(先行研究→先行研究・先行実践)

(理由) 研究論文に限定することなく、論文以外の様々な先行実践について、自研究を位置付けるためにレビューしているものは評価の対象とするため。

*査読結果とその傾向

- ・SGH委員会が行った査読結果の方が高得点を示した
(委員会平均：9.4 グループ平均：7.9)
- ・高得点グループは観点Aが満点である傾向がある→研究目的が確かな動機や背景にもとづいて、明示されている。
- ・低得点グループは観点Aの評価が低い=研究目的が抽象的・ぼやけてしまっている
→それに伴って、観点Cおよび観点Dも低い評価となっている
- ・継続研究はいずれも評価結果の中で中位以上に位置している(継続することの重要性)
- ・学年による偏りは昨年度より小さい(前期課程であっても中位以上に位置するグループがある)

現在の SGH 部門の応募状況：(抜粋)

No.	研究テーマ	大テーマ
1	中高生における在日米軍基地問題に対する関心を向上させるアプローチの考案	葛藤と軋轢
2	障がい者スポーツを通して、日本での障がい者に対する差別・偏見をなくす	葛藤と軋轢
3	Refugee Denials in Japan	リスク、葛藤と軋轢
4	2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、観光名所のマナー改善	リスク
5	大荒れの海で溺れる者が見つかる：グローバル化による社会的環境の変化と個人のアイデンティティ	葛藤と軋轢
6	「できる」を感じられる運動競技とは？運動会における競技の提案	教育
7	女性専用車両の在り方とは	葛藤と軋轢
8	テーブルマナーから学ぶ世界の多様性	教育
9	先進国における、子供の貧困によって生み出される教育格差を是正する方法とは	教育
10	音楽をより被災者の心の支えにするためには	リスク
11	災害時でも打撃を受けない金融システムの構築	リスク
12	Jimoto プロジェクト	教育
13	「価値ある」野次を 一国会の議事進行に関する提案-	葛藤と軋轢
14	レゴマインドストームを用いたゴミ箱作りによるごみ問題の解決	リスク
15	映画から見えるLGBTQへの偏見や差別問題とそれにどう向き合うか	葛藤と軋轢
16	症状別のアニマルセラピーの動物の種類による効果の違い	教育
17	持続可能な社会実現に向けて ～日本企業にCSV導入を促すために高校生ができることは～	葛藤と軋轢
18	栄養不足を改善する食べ方とは	リスク
19	外国語を効率よく学ぶにはどうすればよいか	教育
20	中高生がもっと社会参画するにはどんな方法があるか	葛藤と軋轢

今後のスケジュール：

日程	内容
10月以降	外部評価会の実施
10月20日	研究経過報告書提出・追加エントリー締切【セミファイナリスト選考】
1月10日	研究成果報告書(研究論文)提出締切【ファイナリスト選考】
2月18日	生徒研究発表会 兼 公開審査会
3学期 修了式	ISS チャレンジ 表彰式

2.2 外部連携(課題研究サポート・課題研究支援セミナー・グローバル・カフェ)(仮説Ⅱ)

2.2.1 課題研究サポート

本校卒業生と課題研究に関する意見交換ができる機会を設定し、課題研究に対して大学生の立場からあるいは研究活動やさまざまな取り組みを行っている先輩としての立場からのアドバイスを得ることで、生徒自身の課題研究の発展・深化をうながす。

【日時】

第1回：9月10日(土) 9:30～12:00

第2回：9月24日(土) 9:30～12:00

【会場】

本校E棟 E201教室もしくはE102教室

【参加卒業生】

第1回(9月10日) 5名

第2回(9月24日) 8名

【参加在校生】

第1回 0チーム ※教員側の呼びかけ・説明不足によって、生徒側にこの支援の重要性が伝わらず参加表明者がごく1名であったため、開催を取りやめた。

第2回 11チーム

【サポート内容と生徒への指示】

*当日は現在作成している研究ポスターをふまえながら、研究目的やこれまでの研究成果を発表してもらった後、研究や調査でアドバイスをもらいたいことを相談してもらう。

*この課題研究サポートもしくは今後予定されている「外部評価会」のいずれかに各グループ最低1回は参加することとする。

2.2.2 課題研究支援セミナー

目的：大学や研究所等の外部機関から専門家を招き、生徒の課題研究に資する講演会やワークショップを開催する。高度な専門的内容に触れさせることで生徒の探究心を高めるとともに、研究の方法論の基礎を学ばせること、グローバル化社会の諸相を総合的に捉える力をつけること、課題研究の大学での研究への連続性を理解させることを目的とする。

実施形態：毎週水曜日5限の「PP」（4年生）・「課題研究」（5,6年）の時間帯に校内にて開催し、希望生徒が受講する。今年度10月までの実施内容は以下の通りである。

日時	講師	講義テーマ	受講数
平成28年 6月29日 (水)	早稲田大学 文化構想学部 柳下恵美 先生	20世紀前半に世界を魅了した3人の日本人舞踊家 Three Japanese Performers Who Fascinated the West in the First Half of the 20th Century —ピカソもロダンも熱狂した Japanese Performers—	8名
	東京学芸大学 岸学 先生	「心理学と統計」 Psychology and Statistics —一人の心理はデータから読み取れるか?—	21名
	東京学芸大学 狩野賢司 先生	「生と性」 Life and Sexuality —行動生態学の見地から読み解く—	5名
	三井製糖株式会社 宮坂清昭 先生	「研究と企業」 Study and Business activity —砂糖の企業は甘くない? 「食」の企業にとって研究が持つ意味とは—	16名
9月21日 (水)	上智大学 総合グローバル学部 David Wessels 先生	Your World: Global Peace, Global Conflict 内容: Introduction to Global Studies: Conflicts and Peace in International Relations; Contemporary Topics	20名
10月12日 (水)	立教大学 長有紀枝 先生	「難民・国内避難民問題の捉え方・考え方」	35名

事後の生徒アンケートを分析すると、課題研究支援セミナーを受講して、①知的探究心が高まった ②課題研究での新たな視点が得られた ③基礎的な研究の方法論を理解した ④教科の学習や課題研究をグローバルな視点から俯瞰的に眺められるようになった ⑤進路をより具体的に考えるようになった、といった生徒の変容が見られる。外部機関と連携して各分野の第一人者から講義を受けることはやはり生徒たちにとって大きな刺激であり、課題研究や将来の進路へ示唆を受ける機会となったようだ。

一方、運営面でいくつか課題も見られた。まず、50分という枠では時間が足りず、講師の講義のみに終わり生徒を巻き込んでのディスカッションまで至らない場合が多かった。また、本校では外部講師のお話を伺うチャンスに恵まれていることが裏目に出て、受講希望者が思うように集まらないことがあった。実施形態や募集の方法について再考が必要である。

2.2.3 Global Café

昨年度と同様、年度当初から生徒がスピーカーやファシリテーターを務める生徒主体型と外部講師招へい型の両者を開設している。それぞれに目的が異なっており、生徒主体型は主として「経験・体験の共有」を目的としている。外部講師型の目的は「専門的見地からの意見・情報の獲得」である。今年度はこれまでに生徒主体型を6回、外部講師招へい型を1回開催した。11月以降も外部講師招へい型のグローバルカフェ（第8回から第9回）と生徒主体型を複数回開催予定である。

第1回グローバルカフェ『起震車を体験してみよう！』

日 時：2016年4月21日（木） 場所：本校総合メディアセンター

ファシリテーター：富木柚葉（6年）山崎史子（6年）

起震車体験及び練馬区防災学習センターの方による講話

生徒が主体となって、企画・運営を進め、講話では練馬区で想定される地震被害とその対策等について具体的にうかがうことができた。

第2回グローバルカフェ『WORLD CUP-FOOD FES 報告会』

日 時：2016年5月18日（水）

場 所：本校総合メディアセンター

発表者：中嶋香琳（5年）檜崎翔子（5年）松島未来（5年）

「WORLD CUP-FOOD FES」でフィンランド料理を企画し、商品化のためにフィンランド料理店へのインタビューや試作を行ったことやフィンランド大使館にも英語とフィンランド語で広報をお願いしたことなど綿密な準備の様子の報告があり、さらに「WORLD CUP-FOOD FES」で審査員特別賞を受賞することで参加権を得たタイのイベントで、現地の高校生と商品開発を行ったことについて、プレゼンテーションを行った。

第3回グローバルカフェ『ベトナム高校生との交流会』

日 時：2016年6月13日（月） 場所：本校 E 棟 201 室

・日本の高校に関するプレゼンテーション：宮田真理菜（6年）

・ベトナムの高校生（Trun Vuong 高校・Hoang Hoa Tham 高校）によるプレゼンテーションと日本語の歌の披露の後、プレゼンをふまえた交流会を行った。

第4回グローバルカフェ『ISS 生としてファッションをどうやって楽しむ？』

日 時：2016年7月13日（月） 場所：本校総合メディアセンター

発表者：小山美海（5年）馬路ひなの（5年）

ファストファッションブランドの裏側にある問題を提起し、中高生であってもファッションに関してどんなアクションを起こすことができるか考え、意見交換をすることができた。

前期課程1年生の参加者が多く「自分の服が自分のもとへ来るまでにいろいろな背景があることを知りました」「思いやりの心をもって服に向き合いたい」等感想が寄せられた。

第5回グローバルカフェ『護身術講習会』（石神井警察防犯課）

日 時：2016年9月5日（月） 場所：本校 E 棟 201 室

ファシリテーター：富木柚葉（6年）山崎史子（6年）大石果歩（5年）

生徒が主体的に防災活動に取り組む ISS 防災隊を中心となり、護身術講習会を企画した。

第6回グローバルカフェ『UCL Grand Challenge 報告会』

日 時：2016年10月19日（水） 場所：本校総合メディアセンター

ファシリテーター：関本嵐嵐（4年） 山内奏人（4年）

7月に行われた海外研修 UCL Grand Challenge に参加した生徒2名による活動報告

下級生や教員も参加し、それぞれの活動や経験についての報告と共有を行った。ファシリテーター自身からは今回の研修を通して自らの進路についてもそれぞれ改めて考える機会となったとのコメントがあり、参加した生徒からは「同じ学年で同じ教育を受けている友達が違う経験をして何を感じたのかを聞くことができ勉強になった」「友達が言うことはやはり説得力があり、刺激を受けた」等の感想が寄せられた。

第7回グローバルカフェ『立場を替えても通用する議論を！ リーガル・マインド(法的思考)の本質とは何か？ー』（慶應義塾大学 法学部 駒村圭吾先生）

日 時：2016年10月25日（火） 場所：本校 E 棟 101 教室

法の基礎にある「正しい」という価値判断はどのようなものなのか、身近な具体例からアメリカ最高裁判決の例などを取り上げ、生徒とのディスカッションも交えながらの講義をいただいた。ご講義の最後には「世の中にあふれる不条理に対する根源的な怒り」や「バランスを大切にす冷静かつ公平な姿勢」を持ち、「言葉の重みと可能性を重視する」ことがいかに大切かを生徒へのメッセージとして送られた。講義後も生徒からの質問が途絶えることがなく、生徒にとって新たな視点や課題意識を持つことにつながる時間となった。

2.3 各種研修・交流事業（仮説Ⅰ・仮説Ⅱ）

2.3.1 国内交流

昨年度同様、7月に関西大学高等部との交流を行った。今年度は他に兵庫県立国際高等学校・岡山県立岡山操山高等学校との交流を予定している。

○関西大学高等部との交流

実施日時：2016年7月28日 13:00～16:00

実施場所：本校 E 棟 201 教室

ファシリテーター：本校生徒（6年）

プレゼン発表者：本校生徒 6名（6年3名）（5年3名）

ディスカッション参加者：上記生徒を含め本校生徒は16名

実施概要：SGH校である関西大高等部の生徒11名、教員3名が来校し、交流会を行った。まず関西大高等部よりSGHの取組み、ハワイ研修、課題研究に関する報告・説明があり、次に本校よりSGHの取組み、フィリピン研修、課題研究に関する報告を行った。その後、2つのテーマ「共同体と移民問題—共に生きることの難しさを超える」「地球環境の変化は私たちの生活をどう変えるか」に分かれて、本校生徒と関西大高等部の生徒が混ざってディスカッションを行った。最後に、各グループ本校生徒1名と関西大高等部生徒1名の代表者を選出し、およそ10分でディスカッションの内容を説明した。

2.3.2 国内研修

今年度は、昨年度実施した内容をいくつか入れ替えて国内研修を行っている。既に実施した研修は以下の通りである。

○UK-JAPAN サイエンスワークショップ名古屋

実施日時：2016（平成28）年7月31日～8月6日

実施場所：名古屋大学（東山キャンパス、鶴舞キャンパス）、知多半島巡検。

目的：英国の女子高校生と日本の女子高校生が寝起きを共にしながら、名古屋大学が提供するサイエンスプログラムを体験し、成果を英語で発表するという活動を通して、国際的に活躍できる女性研究者の育成を目指す。英国のクリフトン科学トラストが主催して2001年から行っている「UK-JAPAN YOUNG SCIENTISTS PROGRAMME」の一環であり、今年度は、国連ウィメン（UN Women）のパイロット事業「IMPACT10×10×10」との関連をもたせて、女子生徒のみ（英国高校生16名と日本高校生16名の計32名）の参加で開催したものである。G7倉敷教育大臣会合応援事業でもあった。

参加生徒：本校生徒4年生4名（すべて女子）

○Global Discussion

実施日時：2016（平成28）年8月22日（月）23日（火）

実施場所：名古屋大学教育学部附属中・高等学校

実施概要：2日間にわたり、学校をミックスしたグループ（4～5名）単位でテーマに基づいたディスカッションを行い、最終的にグループの考えをまとめてプレゼンテーションを行った。ディスカッションの各グループには、必ず名古屋大学留学生が入り、ファシリテーターを務めた。グループ活動の他、名古屋大学土井康裕先生によるディスカッションの進め方についての講義や、名古屋大学留学生による様々な国の移民に関するプレゼンテーションも実施された。本イベントは生徒のグループ活動を含め、原則英語で行われた。

参加生徒：本校生徒5年3名

今年度はさらに11月に高知県で行われる「世界津波の日高校生サミット」への参加・3月に関西学院大学で行われる「SGH 甲子園」への出場を軸にした関西研修を予定している。

2.3.3 海外研修

現在の所、行った海外研修は以下の通りである。今年度も昨年度同様7月のイギリスと3月のフィリピンが海外研修の実施場所となっている。

○英国研修—UCL Grand Challenge への参加

実施日時：2016（平成28）年7月22日～8月1日

実施場所：イギリス ロンドン及びケンブリッジ・ホーシャム

United college London・University of Cambridge・Rikkyo School in England

目的：今後世界を担う日英の高校生・大学生が国際社会のリーダーとなる資質を養うことを目的として開催されるプログラムを活用し、UCLが大学として取り組む社会課題についての知識を深め、文化・背景の異なる他者との対話を通して、自己の課題研究の充実を図る機会とする。また、今年度は福島県が後援しての「Facing Disasters: International Disaster Management and Humanitarian Responses」と題された大規模な公的シンポジウムが催される。このシンポジウムに参加して海外の研究者による「東日本大震災」関連の研究発表を聴き、自らもその発表に関わることで、国際的な課題意識の共有の機会を得る。

参加生徒：本校生徒4年2名（男女各1名）。

実施概要：研修の主軸は UCL にての教授陣によるレクチャーとワークショップ・ディスカッションおよび公式シンポジウムへの参加と発表であった。また、ケンブリッジにおいては、ケンブリッジ市内でのフィールドワーク・ケンブリッジの教授陣による講義受講や図書館訪問を行った。UCL におけるグランドチャレンジの大きなテーマ（大学として設定している研究）は・Global Health ・Sustainable Cities ・Intercultural Interaction ・Human Wellbeing の4つであるが、今回は特にシンポジウム関連で災害について事前にレポートが課された。災害については上記4つの大テーマのいずれも関連させることが可能である。本校からの参加者2名にとっても、災害と上記4つの大テーマは個人としての課題研究テーマにも関連させることのできる視点であったと考えられる。

3 研究倫理規定策定に関する取組

昨年度になかった取組としては、研究倫理規定の策定がある。この取り組みは SGH 事業においては特に仮説 I に関連するものであるが、同時に仮説 III の評価の策定にも影響するものと考えられる。具体的には、研究倫理規定の目的の明確化・研究に取り組む際に守るべきことのガイドライン策定・アンケート実施に際してのチェックシートの作成・研究倫理に関わる審査を受ける際の各種フォームの統一などを校内の「特別研究推進委員会」を中心として行った。特別研究推進委員会には副校長・主幹教諭・研究部長・国際教養委員長・SSH 委員長・SGH 委員長・IB 委員長が所属し、各部署からの研究推進に関わる検討事項を議論する。研究倫理に関しては、各委員会では従来単独・個別に取り組む、検討してきたものを、校内で統一する方向で検討した。SGH 委員会においては、SGH における生徒の課題研究の実施状況や実施内容を踏まえて研究倫理規定とアンケートチェックシートを作成し、アンケートチェックシートの試験的採用などを経て、特別研究推進委員会に原案を提示した。

倫理規定に関する具体的な内容は、本紀要内の研究部による別稿を参照いただきたい。

Abstract

In this year, from the very beginning, we started working on the issues that came to light from 2015 initiatives of SGH project. Especially, with regard to project studies, we actually structured comprehensive learning in time, and we are now in the migration period. Moreover, we have further strengthened the external support structure for supporting project studies and we are working on further deepening the initiatives that would enrich project studies in collaboration with external parties. Furthermore, in terms of new initiatives that we could not start last year, we created research ethics, and we have completed the creation of guidelines so far. On the other hand, in relation to the “evaluation” - hypothesis III, we have started convening the evaluation formulation committee, and we are gradually building the system that would help us strengthen collaboration with universities and start special research projects.